

3-3					
主題		ADL 向上への自立支援			
副題		ご利用者の意欲と職員サポートによる相乗効果			
キーワード 1	自立支援	キーワード 2	ADL 向上	研究(実践)期間	12 ヶ月

法人名・事業所名	社福) 大三島育徳会 デイサービス博水の郷
発表者(職種)	前島幹(生活相談員)、野村麻実(在宅サービス部長)
共同研究(実践)者	松岡由佳(生活相談員)、斎藤まどか(介護士)、瀧上憲一(介護士)他

電 話	03-5797-5650	FAX	03-5797-5651
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	平成 14 年 9 月 1 日開始の今年 22 年目のデイサービスである。一日の定員 25 名。お一人ひとりの目的・楽しみ方を大切に地域のお仲間と楽しい職員が共に過ごしている。ご利用者主体を軸とした職員と“共に支え合う”関係を育み、その人らしい“いきいき”“わくわく”感が生まれる表情豊かな空間を目指している。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

開設当初より個人の自律・自立心の助長(自立支援・セルフサービス制の実現)に努めていた。その一環として自ら食べたお膳、使用した湯呑・おしぼりをご利用者自身で片づけるセルフサービスの取り組みを行っていた。

新型コロナウイルス禍になり、感染症対策のために時間がとられ、お膳の片付けは職員が中心に行うようになった。ご利用者と職員のコミュニケーションの機会が減り、歩行の機会が少なくなったことで筋力低下が心配された。新型コロナウイルスが 5 類へ移行し、セルフサービスを再開することとなった。自立歩行のご利用者は積極的にお膳の片付けを行うが、介助が必要なご利用者から「自分ではできない」との声が多く、消極的。ご利用者の ADL の変化を踏まえた上で、セルフサービスの見直しが必要になった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

〈実践の目的〉セルフサービスをご利用者が意欲的にでき、満足度、達成感に繋げる。ご利用者の表情の変化にも注目をしながら ADL の向上を目的とし次の 3 点を仮説とした。

〈仮説〉

(1) セルフサービスの取り組みにより、少しでもできる動作や活動が増えていけば、自宅やデイサービスでの生活、健康状態に良い影響を与えることができる。

(2) セルフサービスを通じてコミュニケーションを取ることで思考や感情に刺激を与え、ご利用者の認知機能の維持が向上する。 コミュニケーションが増えることでご利用者の表情が豊かになり、その人らしさが生まれる。また、常日頃からご利用者とコミュニケーションをしっかりとすることで、体調の些細な変化に気付けることができる。

(3) ご利用者全体の ADL が向上する結果 ADL 維持等加算の利得率が上がる。

《3. 具体的な取り組みの内容》

取り組むうえで職員の意識を変えるための会議を行った。また ICT を活用し、業務の効率化を図り、職員の配置を変更した。会議で以下のことを決めて取り組んだ。

- (1) 片側介助の方や杖歩行の方はワゴンを使用して片付けを行う。
- (2) 車イスの方はご本人の許可を得たうえで膝の上にお盆を乗せてもらい、職員と一緒に行動。
- (3) ご本人が気持ちよく出来るような声掛けを行い、成功例を職員間で情報共有、統一对応とする。
- (4) その日のご利用者個人の体調に合わせて、臨機応変な対応を心掛ける。
- (5) 初めてのご利用者には丁寧な説明を行う。次回利用につながるような声掛けを行う。
- (6) ご利用時の様子を記載する連絡帳ノートにセルフサービスの様子の写真を貼ることでご家族とも情報を共有する。
- (7) B I の評価項目内容を改めて職員間で周知し、ADL の向上を目標に取り組んでいく。

《4. 取り組みの結果》

セルフサービスを行うことで15名の万歩計の歩数が平均して250歩増えた。ご利用者1名、歩行の機会が増えたことでデイサービスのフロアから送迎車までの約35mの距離を車いすから歩行での移動に変わった。また、コミュニケーションをとっていき中で足腰の痛みや眩暈や疲労などの体調の変化に気がつくことができ、休養時間の確保や家族連絡と早期に対応することが出来た。

大幅な利得率アップには至らなかったが、職員の中でのADL維持等加算に関する知識と日々の取り組みが利得率アップになることを意識できた。

職員とコミュニケーションをとる機会が増えたことでいつも簡単な挨拶程度だけであった認知症の方の発語が増え、笑顔が多くみられるようになった。

セルフサービスの様子の写真で共有した69名中8名のご家族から普段自宅では見られない本人の様子をみる事ができ、驚きと感謝の言葉がきかれた。アンケートにてご利用の目的として20名が自立支援を目的としている。思いに沿ったサービスが提供されていますか、という質問に対して15名がしっかりと提供されていると回答している。

口腔ケアや排泄に行くことが消極的であったご利用者が、セルフサービス後に近くにある洗面台で口腔ケアをすることや排泄にスムーズにいくようになり、清潔保持の機会となった。

《5. 考察、まとめ》

職員は毎回丁寧に説明し、ご利用者のやる気になる応援の言葉やセルフサービスへの感謝の気持ちを伝えた。その取り組みがよりご利用者の意欲になった。成功例は職員間で共有し、振り返ることで職員のやりがいが高まり、セルフサービスが定着した。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人(ご家族)に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「精神科病棟における認知症の人に対するケアの実態と治療から自立支援の課題」(2021年)
「居宅支援事業所のケアマネジャーの自立支援に対する意識とケアマネジメントの実践から浮かび上がる課題に関する研究」(2017年)

《8. 提案と発信》

職員は日々の業務について、計画を立案(Plan)、実行(Do)、評価(Check)、改善(Action)すること(以下、PDCA)で業務の質を上げることができた。ご利用者にできることが増え、自信になり、ご家族の満足度も高まった。今回の成功体験を通じて、些細なことでもみなで話し合い、PDCAに沿って問題に取り組むチームとして成長できた。

歳を重ねることでの衰えは逆らえない。その中でいかにご利用者のADLを維持、向上させていくか今後も試行錯誤していかなければならない。